

風疹の流行と日本病院会からの推奨

国立感染症研究所感染症疫学センターのまとめによると、2013年の風疹累積報告数は第48週までに14,291例（12月4日現在暫定値）となり、昨年一年間の累積報告数（2,392例：暫定値）の約6倍となっています（図1）。今年の流行のピークは第19～22週であったと考えられ、第23週以降、週毎の報告数は次第に減少して、第48週現在の報告数は昨年を下回っていますが、それでも報告数が少なかった一昨年までと比べると多い数値を示しています。（図2）。

これまで風疹は子どもの軽い病気と考えられてきましたが、近年の流行は大人が中心で、ワクチン未接種あるいは接種歴不明の成人が全体の約90%を占めています。成人例が多いことを反映して、職場での感染拡大と家族内への持ち込みが目立っています。流行の中心は20歳代から40歳代の成人男性ですが、女性も男性より患者数は少ないものの、20歳代をピークとして10歳代後半から40歳代の妊娠出産年齢に多発しています（図3,図4）。これらの患者発生動向は、我が国における過去の予防接種施策と接種率に極めてよく連動しています。また2012年～2013年7月7日までに合併症として風疹脳炎が16例、血小板減少性紫斑病が67例報告されており（いずれも成人例）、決して軽い病気と侮ることはできません。

風疹のもっとも重要な合併症は先天性風疹症候群（CRS）です。妊娠初期に風疹ウイルスに感染した妊婦から生まれてくる赤ちゃんにみられる奇形症候群で、白内障、先天性心疾患（動脈管開存、肺動脈狭窄等）、難聴、精神運動発達遅滞などの徴候が特徴です。風疹を発症しなかった不顕性感染の妊婦からも生まれる可能性があり、2013年だけでもこれまでに26例が報告され（図5）、さらに増加すると考えられます。CRSの子供たちは、様々なハンディキャップを持つとともに、長期間にわたって風疹ウイルスを排出するため、そのための対策も必要となります。

風疹の流行は、2～3年連続して認められることが多いことから、来年再び流行が繰り返されることが懸念されます。風疹は不顕性感染（15～30%程度）があるため、その流行を抑えるためには、ワクチン接種により、多くの国民が免疫を持つことが重要です。特に今回流行の中心となっている年齢層は、風疹に対する十分な免疫を持っていない世代と考えられ、この世代の方たちが免疫を持たない限り、今後もまた同じような流行が起きる可能性は十分に考えられます。病院としては、職業感染予防と院内感染予防のために、まず職員等（派遣社員、ボランティア、実習生も含む）が風疹に対する免疫を持つようにすることが重要です。抗体検査で十分な免疫のない職員、証明された風疹の罹患歴がなく風しん含有ワクチンの接種歴がない、不明、もしくは1回のみ職員に対しては、風疹含有ワクチンの接種を行うことが推奨されます。この場合、抗体検査で十分な免疫がない職員、風疹の罹患歴がなく風しん含有ワクチン接種歴がないもしくは不明の職員に対しては2回のワクチン接種を、ワクチン接種歴が1回の職員に対しては追加（1回）のワクチン接種を行

うことが推奨されます。

通院中の患者様やそのご家族など、職員以外の方たちに対しても、職員と同様の考え方でワクチンを接種することが望まれますので、ワクチン接種が禁忌とならない感受性者*の方には、積極的にワクチンを接種するよう働きかけることも、医療従事者としての役割となります。

今後、成人の感受性者*を減らすために、風疹含有ワクチンの継続的な接種推進が望まれます。

*風疹に対する感受性者

抗体検査を実施した場合：

抗体検査で十分な免疫を持たないもの（風疹 HI 抗体価 16 倍以下）

抗体検査を実施しない場合：

証明された風疹の罹患歴がなく、風疹含有ワクチンの接種歴がなし、不明、1 回のみのもの

※ 抗体価として国際単位を用いられる場合は次の文献をご参照ください

参考：

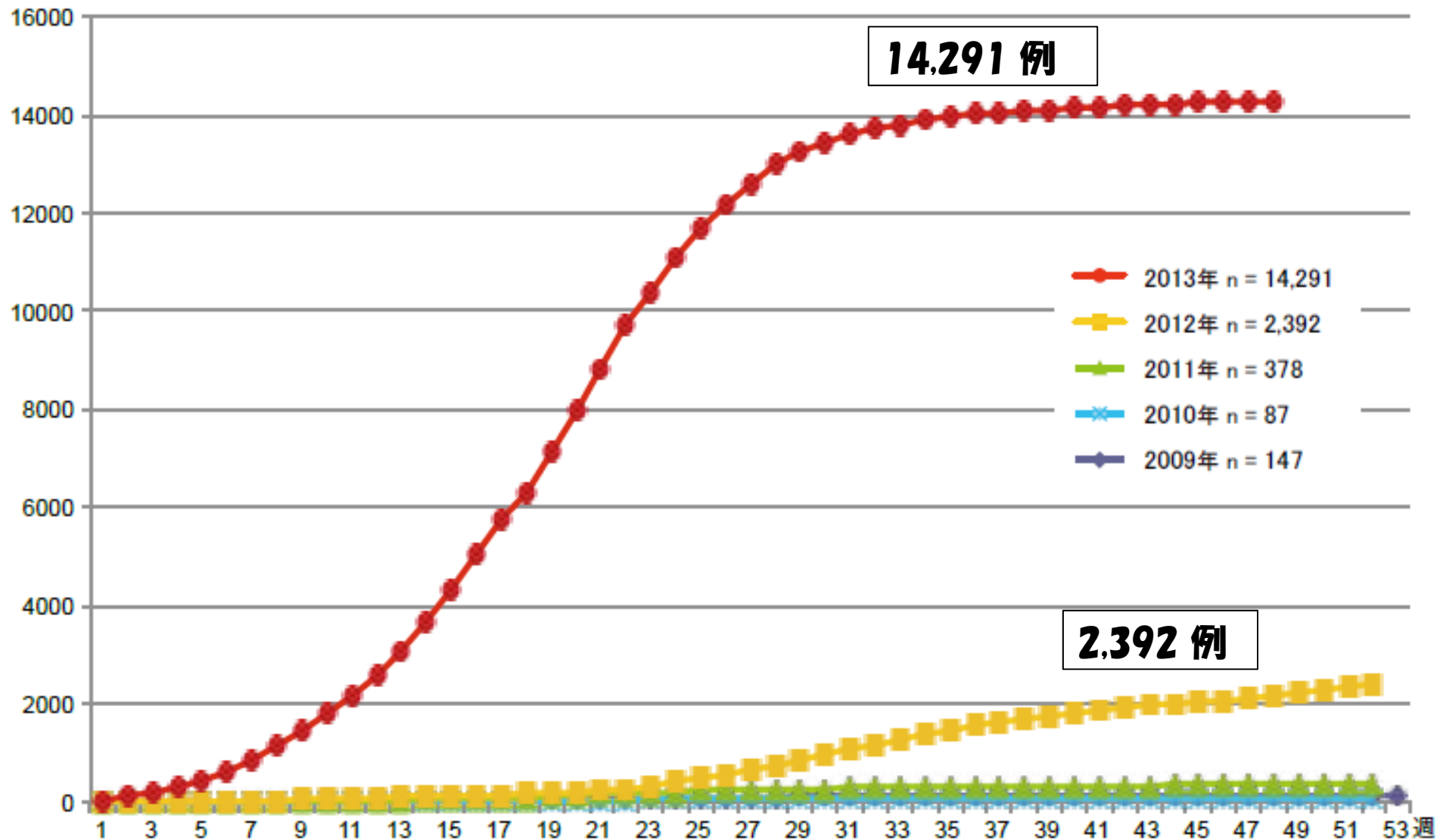
風疹抗体価の読み替えに関する検討-HI 価と国際単位. 病原微生物検出情報 (IASR)
Vol 34, 107-108 (2013年4月号)

平成 25 年 12 月 24 日

文責：日本病院会 感染症対策委員会

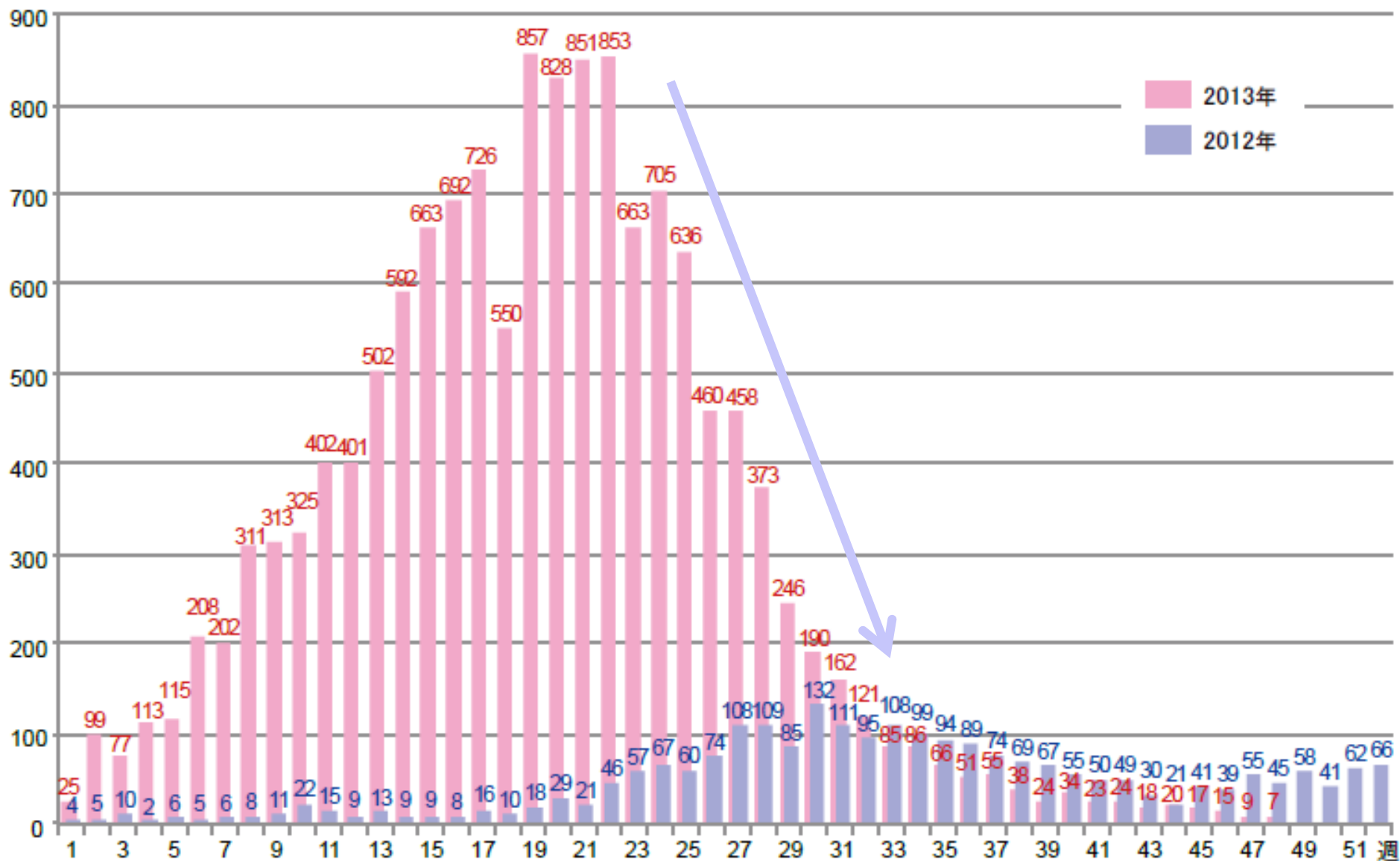
委員長 木村 哲
副委員長 小林寛伊
委員 大石和徳
委員 岩田 敏
委員 一山 智
委員 洪 愛子
委員 菅野みゆき
委員 黒山政一

図1 風しん累積報告数の推移2009～2013年(第1～48週)



診断週にもとづいた報告
 感染症発生動向調査 2013年12月4日現在

図2 風しん累積報告数の推移2009～2013年(第1～48週)



診断週にもとづいた報告
感染症発生動向調査 2013年12月4日現在

図3 年齢群別接種歴別風しん累積報告数(男性) 2013年 第1~48週(n=10,940)

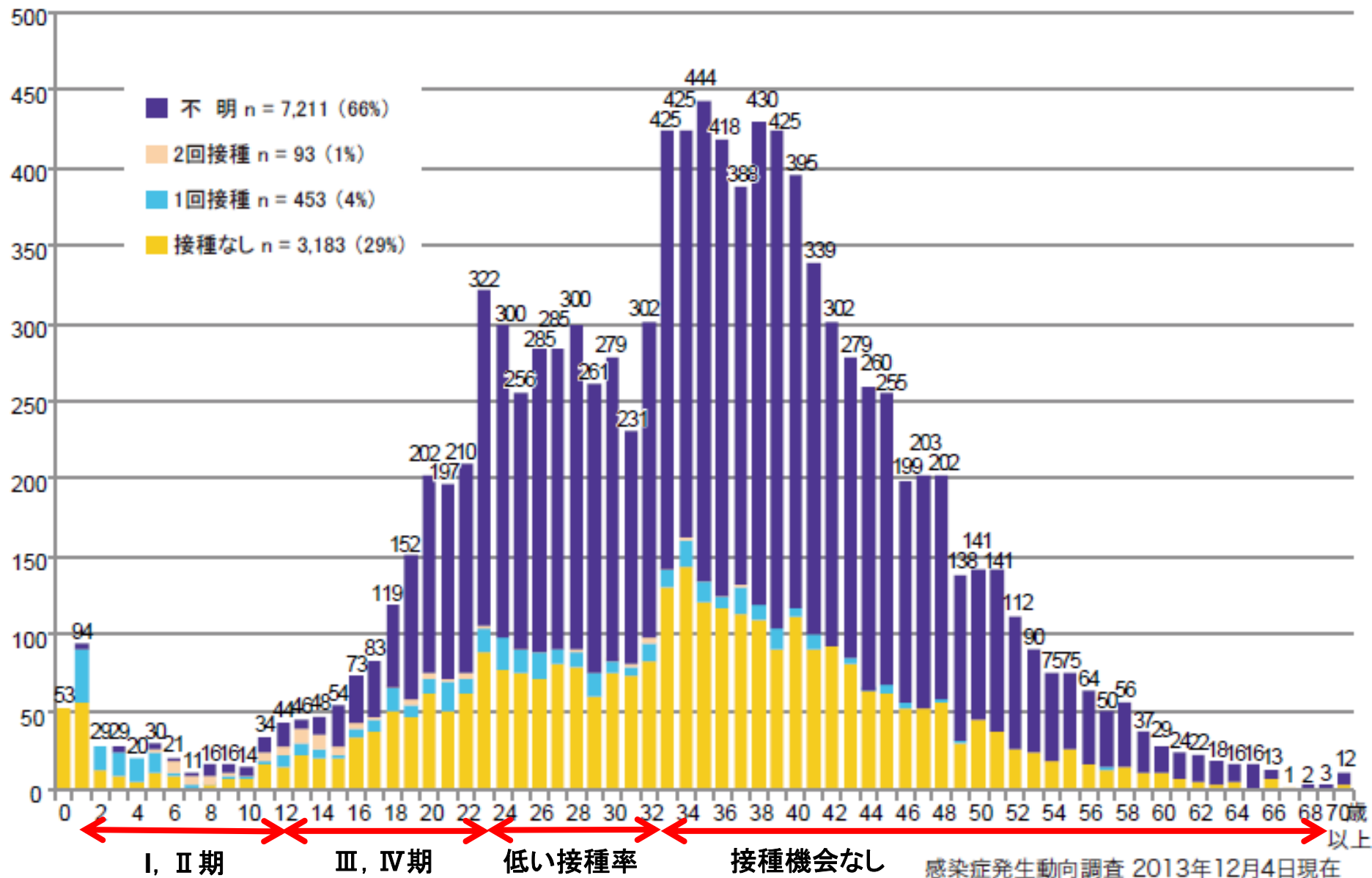


図4 年齢群別接種歴別風しん累積報告数(女性) 2013年 第1~48週(n=3,351)

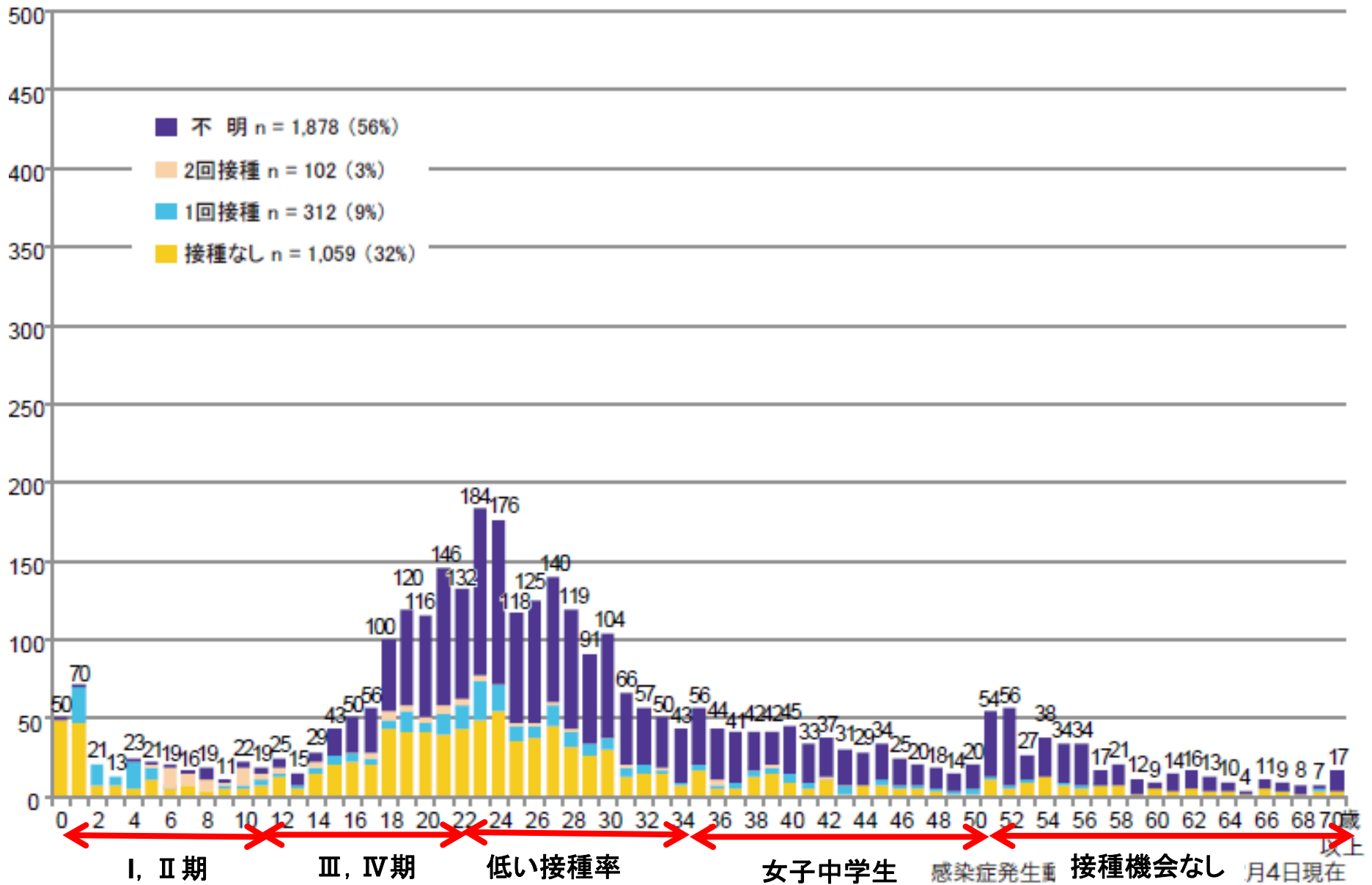


図5 先天性風しん症候群 (CRS)の報告

2013年(n=26)

感染症発生動向調査
2013年12月4日現在

<http://www.nih.go.jp/niid/ja/rubella-m-111/700-idsc/4158-rubella-crs-20131204.html>

年	診断週	報告都道府県	感染地域※	性別	母親のワクチン接種歴	母親の妊娠中の風しん罹患歴
2013年 (n=26)	2週	大阪府	大阪府	男	無	あり
	10週	愛知県	愛知県	女	無	あり
	12週	東京都	東京都	男	無	あり
	16週	神奈川県	神奈川県	男	無	あり
	16週	愛知県	愛知県	男	不明	無
	23週	東京都	神奈川県	女	不明	不明
	25週	東京都	東京都	男	不明	あり
	27週	千葉県	千葉県	男	不明	あり
	30週	東京都	埼玉県	男	不明	あり
	32週	東京都	東京都	女	無	あり
	32週	東京都	東京都	男	無	あり
	34週	東京都	東京都	男	あり(平成4年:MMR)	無
	34週	東京都	神奈川県	女	無	不明
	37週	大阪府	大阪府	女	不明	あり
	39週	埼玉県	埼玉県	男	不明	不明
	40週	大阪府	大阪府	女	無	あり
	41週	東京都	東京都	女	不明	あり
	43週	東京都	東京都	男	不明	あり
	43週	東京都	東京都	女	無	あり
	44週	埼玉県	埼玉県	女	あり(年不明:種類不明)	あり
	44週	三重県	大阪府	男	無	あり
	44週	大阪府	大阪府	男	不明	あり
	45週	和歌山県	和歌山県	男	あり(平成12年:風疹単抗原)	不明
	45週	大阪府	大阪府	女	不明	あり
	45週	東京都	不明	女	あり(平成21年:種類不明)	不明
	48週	神奈川県	神奈川県	女	無	あり